

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 19 回:2000年問題の問題

「やあ、久しぶりに声を聞いたな、全世界統一政府交通管理局局長」
「最近、暇でな。ちょっとあんたと馬鹿話でもしよとおもたんや、全世界統一政府気象庁長官。なんぞおもしろい話はないかいな」
「あと2日で西暦3000年だろう。今、昔の文献を調べていたんだが、どうやら1000年前の1999年には、2000年問題というのがあったらしい」
「何や、それ。どうゆう問題や」
「それがわからない。具体的に何があったのかはまるで書かれていないんだが、世界中の人間が、水や食料を備蓄し、交通手段もストップするからと外出や旅行をせず、ひたすら時のたつのを待ったと書いてある」
「水や食料を備蓄？ 地震か」
「当時はまだ地震予知は無理だったはずだ。それに、世界中で一斉に地震が起きることなどありえない」

「例の世紀末思想ちゅうやつちゃうか。2000というキリのいい数字に何となく不安を感じるというような……」
「いや、そんな迷信じみたものではなく、現実の恐怖だったようだ。この新聞には、電気やガス暖房のかわりに、石油ストーブを購入する者が増えた、とある」
「氷河期や。まちがいない。恐竜の絶滅も寒さによるものらしいからな」
「そうかな……でも、それならどうして石油ストーブならOKなんだ」
「そんなもんわかるかい」
「こっちの文献によると、恐怖の大王というのは、2000年問題のことだ、と書かれている」
「京風の大王？ 舞妓はんみたいな格好した大王か」
「いや、どうやらこれは、ノストラダムスという預言者の終末予言に出てくる言葉らしい。恐怖の大王が降ってくる、というんだ」

「降ってくる？ もしかしたらそれ隕石とちゃうか。恐竜の絶滅も隕石によるものらしいからな」
「隕石の落下ならば、時のたつのを待つというのがわからない。たぶんちがうだろう」
「ほたら、何や」
「何か新しい伝染病の菌が爆発的に蔓延したんじゃないかな。水や食料を備蓄して、外出せずに、菌の伝播力がさがるのをじっと待った……」
「かもわからんな。恐竜の絶滅も伝染病によるものらしいからな」
「ちがうと思うね。伝染病が、どうして2000年ちょうどに広まるとわかるんだ。それに、交通機関がストップするというのも変だ」
「おまえ、自分でふっというて、自分で否定すな」
「まあ、とにかくよくわからんということだ。しかし、あれから1000年もたっているんだ。今回は何も起こら

ないだろう」
「そやな。文明の発達度合いがちがうからな。1000年前ゆうたら、人間あほばかりやと思うわ」
「あれ……私のところのWCオペレート・コンピューター、今、2999年の次に3000年と入力しようとしたが……うまくいかないぞ」
「WCオペレート・コンピューターゆうたら、あの世界中の気象をコントロールしてるやつか」
「そうとも。おかしいな……」
「ありや、そういうたら、わしとこのETCコンピューターも、3000にならんわ」
「ETCコンピューターといえば、全世界の交通機関のコントロールを一手に引き受けている中央管理システムじゃないか」
「せやねん」
「困ったな……でも……」
「たいしたことないやろ、それぐらい」

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 19 回:2000年問題の問題

「そうだな」

「せや」

というようなことが果たして1000年後、2000年後にあるかどうかは別として、どうしてこんなことになったのかを考えてみたい。おお、今年を締めくくる今回は、ラクゴ・ザ・フューチャーはじまって以来のアカデミックな考察だっ！

西暦というのは、現在、世界でもっとも多く使用されている紀年法だが、イスラム教国ではヒジュラ暦が、東南アジアでは仏滅紀元などが使われており、また、多くの小国家ではそれぞれ独特の暦が用いられている。つまり、西暦というのは世界共通ではないのだ。コンピューターその他は、「まあ、共通に近いかな」ぐらいの認識で西暦を使っているわけだが、実際にはかなりの人々が、来年、世紀末とは無縁の生活を送ることになる。谷甲州さん

は、先日、世紀末とSFという題のパネルディスカッションがあった時、「どうしてみんなが世紀末世紀末と騒ぐのかわからん。チベットでは(谷さんは昔、チベットに住んでいた)何十年か前にもう世紀末を迎えていた」という意味の発言をしていたが、そろそろのとおりである。世紀末とか言っているのは、グレゴリオ暦(だっけ)を使っている人々だけの問題なのである。

それなら、いっそのこと、西暦をやめてしまっってはどうか。考えてみれば、日本は元号という結構なものを西暦と併用している。これならいくら、その、ほら、あの、例の、象徴のおかたの家系であっても、3桁になることは、まあ、たぶん、おそらく、たいていないであろうと想像されるわけで、今後、憲法が改正されないかぎり、2000年問題どころか1000年問題もまず起こらないと考えられるわけである。でも、それじゃあ日本国内の機器

類はいいとしても、国際的には通用しないって？ そんなことはない。元号を世界標準にしていまえばいいのだ。世界征服？ 豊臣秀吉じゃあるまいし(太平洋戦争じゃあるまいし、というべきか)そんな物騒なことをしなくても、暦の世界で日本が国際的リーダーシップを握ってしまえばそれでよい。そうなりゃ、世界中が平成〇〇年だ。アメリカなんかでは、「Hey! Say!」となかなか人気を博すのではないか。

というわけで、暦の問題も無事解決した。え？ これで終わり？ うーん、なかなかアカデミックな話題というのは続けにくくて。しかし、銀河系全体で日本の元号が使われているような遠未来の話というのは現在考えていて、来年か再来年には、ここガイナックスにおいて何らかの形で発表できと思うので、乞うご期待。

では、今年のしめくくり、落語と

SFの未来について考えてみたい。これこそ最も切実な2000年問題なのである。

「こんにちは」

「お、おまはんかいな。こっちはいり。どこ行ってたんや」

「ちょっと松鶴の落語会に」

「松鶴いうたら笑福亭松鶴かいな。今の松鶴は何代目やったかいなあ」

「143代目とちゃいまっか」

「先代の142代目が亡くなったときは、跡目問題でえらい揉めたなあ」

「そうですなあ。誰が跡を継ぐか、毎日、全国紙のトップ記事でしたからな」

「それにしても、落語がこないに身近なものになるとはなあ。全世界の子供のアンケート調査結果を見ても、将来になりたい職業のランキングで堂々の一位や」

「世界中に『国』という概念がなくなって、全世界統一政府が樹立された時、

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 19 回:2000 年問題の問題

そのトップと閣僚を落語家から選ぶ、という法律が制定されて以来のことです。でっしゃろな」

「今は、世界の人口の 86 パーセントが落語家らしいわ。ある統計によると、新作落語は、一日平均 1000 本は作られてるらしい」

「例の『世界新作落語大賞』、今年はどうなりましたん？ サムが出したやつが、最終に残ってたて聞いてましたけど」

「選考でかなり揉めたらしいけど、岩石マコゆう女性の、ぼけた江戸っ子の兄弟愛を描いた『ぼけ兄弟(きょうでえ)』ちゅう作品が大賞や。サム『吸い取り・取るベイベー』ゆう吸引テーマの長編落語は佳作どまりやった」

「残念でしたな、牧の尾・サム」

「あの賞とったら、賞金が 5 兆 6 千億クレジット。惑星の二つでも買えるほどの金額や。いきなり大富豪やからな。わしらもおこぼれをちょうだいで

きたものを……」

「でも、サムはなかなか奢ってくれまへんやろ」

「いや……なんでも京都のほうで、おにぎりとパンをみんなに配ってたで。豪儀なもんや」

「こんな楽屋オチ言うても誰もわかりまへんやろ」

「かまうかい。年忘れや。年忘れついでに言うてしまうと、選考委員のリコ・早島の評で……」

「それはやめときなはれ。洒落になりまへんで」

「そうかな……ほなやめとくわ」

「あんたもびびりでんな」

「やかましわい。とにかく、メディアでも朝から晩まで落語家が落語をバンバン放送してるし、今や世界を動かしてるのは落語家といっても過言やない。でも、昔、落語や落語家が滅びかけた時代があったいうのを、おまはん知ってるか」

「あははは。冗談でっしゃろ。こんだけ流行ってるのに」

「それが、『落語は、いつもいつもおんなじことばかりやってて古くさい』いうて、他のメディアに押されて、たいへんやったことがあったらしいわ。落語家の数も今とは比べものにならないくらい少なくてな」

「信じられん話ですな。古くさいいうても、毎日、すごい着想の新作がどんどん出てきてるのに。落語は、流行の最先端でっせ」

「ところで、あれがとうとう滅びたな」

「あれって何でっか」

「ほら……あの……何ちゅうたかな。ここまで出かかってるんやが……え……えす……えすえ……」

「えすえす製薬のポポン S。あれ飲んだらおしっこが黄色うなりまっせ」

「ちがう！ えすえ……わかった。えすえふや」

「えすえふ？ ああ、あのレッド・デー

タ・エンタテインメント(註・絶滅寸前の娯楽を掲載した資料)の筆頭に毎年なってたやつですな。とうとうあきまへんでしたか」

「こないだ、最後の一冊が滅んだのが確認されたそうや」

「言うたらわるいですけど、そらしゃあおまへんで。だいたいえすえふは古くさい。いつまでたっても、古典的な道具立ていうか、タイムマシン、パレルワールド、宇宙人がどうしたこうした、惑星間戦争がどうしたこうした……みたいなことばかり書いては、そら、みんな飽きてしまいますわ」

「しゃあないがな。それが伝統芸能としてのえすえふのネタなんやから」

「しかし、ようそんだけのネタで、何百年も続いてましたな。そのほうが驚きですわ。新しい血を入れようとか、考えへんかったんかな」

「伝統を崩したらあかん、という頑なな伝承主義が根強かったからな。必ず

TANAKA HIROFUMI
P R E S E N T S

RAKUGO THE FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第 19 回:2000年問題の問題

科学知識を出せとか、シリーズに一回は時間旅行ネタを使えとか、絶対に守らなあかんむずかしいルールがいろいろあって、素人にはなかなか手のだせんようになってたからな。それも、流派流派で違ってて、その名取りになるにはかなり金も使わなあかんようになってたらしいわ」

「家元制度いうやつですな。そうか……ついにつぶれてしまいましたか。なんやさびしいなあ……」

「扱ってるもんが、古いもんばかりやったからな。時間旅行とか宇宙人とか恒星間飛行とか最終戦争とか地球侵略とか……」

「とっくに実現してることはかりですからな」

「そやな……でも、あれでも、えすえふが時代の最先端の娯楽やった時代もあつたらしいで」

「あははははは。そんなあほな。あんな古いもんが……あははははは」

「それもそやな。あははははははは」

「あははははははははは」

書いてるうちに、冗談ではすまんような気になってきた。

来年もよろしく。